

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 7 月 30 日現在

機関番号：32647

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23531084

研究課題名(和文)戦後沖縄における保育者の関係アイデンティティに関する研究

研究課題名(英文)Research On Relational Identity of Nursery Teachers in Postwar Okinawa

研究代表者

岩崎 美智子(IWASAKI, MICHIKO)

東京家政大学・家政学部・教授

研究者番号：90335828

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円、(間接経費) 990,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、保育者の「関係アイデンティティ」を解明することを中心課題とし、沖縄県の児童養護施設に勤務する保育士を対象として、詳細なインタビューを実施した。語りからは、ロールモデルの影響や価値追求型の職業選択、上司・同僚との協働や子どもとの関わりが明らかにされ、彼女たちが他者とのつながりに価値を見出す人びとであることが再確認された。加えて、居住地域と専攻を異にする大学生の比較から「養護性」の形成要因を量的調査によって把握し、災害という危難に直面した保育士の活動や心情についても考察を試みた。

研究成果の概要(英文)：This research involved detailed interviews with nursery teachers working at children's home in Okinawa Prefecture, with a primary focus on clarifying the "relational identity" of nursery teachers. Based on these interviews, various issues were highlighted, including the impact of the role model; job choice based on the pursuit of specific values; cooperation with superiors and peers; and the teachers' relationships with the children. The results reaffirmed the fact that the nursery teachers were individuals who placed value on their relationships with people. In addition, comparing university students living in different regions with different specializations, we quantitatively surveyed factors forming "nurturance". We also studied the activities and feelings of nursery teachers who had been directly exposed to the danger of natural disaster.

研究分野：福祉社会学、保育学、児童福祉学

科研費の分科・細目：教育学

キーワード：保育者 沖縄 関係アイデンティティ 養護性 困難 語り

1. 研究開始当初の背景

研究代表者は、本研究に先立って、保育所で長年働いてきた全国の保育士たちへの聞き取り調査を実施してきたが、その過程において、沖縄県の苦難に満ちた歴史のなかでの保育所設立の経緯や、沖縄の保育士たちが示した子どもたちへの思いの深さが印象として残った。児童福祉学や保育学分野では、施設で暮らす子どもに関する研究は数多くあるが、子どもの養育を担当している保育士に関する研究は、労働条件などいくつかのテーマに限られている。同じ保育士ではあるが、保育所と比べて、課題をかかえる幅広い年齢層の子どもたちを養育し、かつ職務としても難しさが予想される施設保育士の実態はどのようなものなのか。彼女らの養護実践を明らかにし、保育者を養育へと向かわせるものの特質を解明することを構想した。

2. 研究の目的

本研究の目的は、第一に、児童養護施設で働く現役の保育士を対象に、子ども時代からの人生をていねいに聞き取ることによって、子どもとの関わりや彼女らの生活、心情を描き出し、養護・保育実践とともに記録することにある。保育者とは、人とのつながり(交流)に価値を見出し、それを生きがいとする人びとである。そのような傾向を「関係アイデンティティ」ととらえて、その特徴や形成過程を考察することを第二の目的とした。

具体的には、(1) 児童養護施設で子どもたちを養育する保育士たちが、特に子どもとの関わりにおいてどのような経験をし、何を思い、考えていたのかを明らかにする、(2) 保育士の「養護性」の形成過程を、子ども時代の経験や心情とからめて検討する、(3) 大学生を対象に、地域と専攻の相違に基づく「養護性」の特徴を量的に把握する、(4) 困難な状況におかれた保育士たちの活動や心情を知る。以上の4点を目標に、研究を進めた。

3. 研究の方法

上記の目的を進めるため、つぎの方法で研究をおこなった。(1) 50代の施設保育士たちに詳細なインタビュー調査をおこなう、(2) 70代元保育士のインタビューデータを分析する、(3) 沖縄県内と東京都内それぞれの大学に通う学生を対象に質問紙調査を実施するが、分析に際しては、おもに心理学分野で使われている「養護性」の概念をもちいて考察する、(4) 困難な状況下にある保育士の活動と心情を理解するために、2011年3月に地震と津波の被害に遭った東北地方在住の保育所保育士のもとを訪れて、災害当日の行動や思いを語ってもらう、の4点である。以上の研究成果を、日本保育学会や OMEP 世界大会で発表するとともに、メンバー各自が論文を執筆し、平成25年度末には3年間の研究成果をまとめた報告書(論文集)を作成した。

4. 研究成果

(1) 沖縄県における児童福祉の特徴 敗戦後、本土復帰後、現在

沖縄県の児童福祉の特徴について、敗戦後、本土復帰後、現在という3つの時代区分をとおして整理した。児童相談所への相談をみると、敗戦後は「窃盗、強盗」といった非行相談が目立っていたが、本土復帰後は、障害相談と養護相談が増加した。2010(平成22)年現在の相談件数は過去最多で年間4,000件にも及んでいる。相談受付内容を全国と比較すると、養護相談と非行相談の割合が高く、「保護者の放任」「養育拒否」等家庭環境に起因する相談が目立つ。それとも関連するが、児童虐待相談の著しい増加が見られる。「虐待」や「放任」という用語が登場したのは本土復帰後だが、その増加が目立つようになったのは1990年代後半からである。

児童養護施設への入所理由は、敗戦後は孤児、父母の疾病や父母の精神障害が目立って

いたが、本土復帰後は家族環境に起因する理由に変わり、現在は虐待による入所が大半を占めている。さらに、里親委託率が全国3位と高いことが指摘できる。敗戦後は社会的養護を必要とする子どもに対して施設数が圧倒的に足りない状況があったため、児童福祉法のなかに「但し書」という独自の規定を策定して里親制度の整備を進めた歴史がある。本土復帰後も里親会を設ける等の取り組みや積極的な里親開拓が行われたことも現在の委託率につながっていると考えられる。

(2) 保育士の「関係アイデンティティ」子どもとの関わりをとおして得たもの

本土復帰以降の沖縄県の養護問題を4期に区分し、第1期(1970年代)非行への対応、第2期(1980年代)親の「就労」による施設入所、第3期(1990年代)新たな貧困、第4期(2000年代)児童虐待の増加、第5期(現代)養護問題の拡大、と位置づけた。そして、それぞれの時代を特徴づける社会的出来事や社会問題、児童福祉関連施策をあげたうえで、子どもとの関わりに言及した50代現役保育士の語りを取りあげた。保育士たちが「印象的な出来事」として語ったのは、被虐待児への対応といった「養護実践上の悩みや困難」であり、卒園させた子の自死や事故死など「子どもの不幸」という問題である。「苦しかったこと」は、校内暴力やシンナー、売春への対応ややんちゃ坊主の暴言など激しい子どもと関わる「養護実践上の困難」であり、中卒後本土就職する子や性虐待を受けた子など厳しく深刻な状況にある子を思い、自らの無力感を感じた経験であった。彼女たちの認めた価値が他者理解と他者との関係性であることから、保育士のパーソナリティを特徴づけるものは、「関係アイデンティティ」であるといえるだろう。

(3) 沖縄県在住元保育士にみる「養護性」

の形成要因

戦後混乱期から本土復帰前後まで沖縄県の児童養護施設に勤務していた保育士6名(平均年齢70歳)の幼少期からの生活と意識に関する語りをとおして、「養護性」の形成要因をLewis, M.の「ソーシャルネットワーク理論」を援用して考察した。

社会的機能(役割)の項目からみると、「保護」に関しては、父・母・兄といった血縁・同居家族とのかかわりが多いが、食事や着替えなど日常生活における「世話」に関しては、必ずしも血縁・同居家族に限られているわけではない。また、「世話」をした経験では、全員がきょうだい・甥や姪・友だちのきょうだいなど、なんらかの異年齢の子どもとの接触体験が豊富であった。「養護性」の項目においては、自分を最もかわいがってくれた人として、父親や兄など、男性の家族や地域の人を挙げる者もみられ、母親については、仕事や家事といった生活に追われて多忙であり、ゆっくりとかかわったという意識は低いことが語られていた。そして、「遊び」や「学習」においては、地域の人々、友だち、教師など、家族以外の他者とのかかわりが顕著である。

以上、「養護性」の形成要因について考察した結果、家族だけではなく地域や家族以外の他者とのかかわりの頻度が高いこと、自身の家族成員と他者との境界はゆるやかであること、必ずしも母子関係のみが重要であるとはいえないこと、幼少期からの乳幼児との接触体験の豊かさ、の4点が明らかになった。

(4) 大学生における「養護性」の形成

大学生の養護性意識の形成状態を明らかにし、その要因を他者との関係性に着目して検討することを目的とした質問紙調査を2011年7月~11月に行った。対象は、沖縄県内の大学で保育学を学ぶ学生(以下、沖縄

(保育)109名、東京都内の大学で保育学を学ぶ学生(同、東京(保育))147名、東京都内の大学で英語学を学ぶ学生(同、東京(英語))76名の計332名である。

分析の結果、以下の3点が明らかになった。

英語学専攻より保育学専攻の学生に高い養護性意識が示された。具体的には、「赤ちゃん・子どもへの関心」および「養護的役割の受容」の項目で保育学専攻が有意に高かった。保育学専攻の学生の養護性意識の形成状態に地域差が認められた。特に、沖縄(保育)において「多様な養護対象」「子どもと関わる自信」が有意に高く、子どものみならず多様な養護対象への共感性と子どもとかわる技能の両立が特徴としてみられた。

養護性の形成状態と養護性の発達には「他者との関係性」が関与することが示唆された。他者との関係について、東京(保育)は「自分にとって重要な他者」として主に父母など親族をあげる一方、沖縄(保育)は親族に加え、友人や恋人を重視する傾向が高く、東京(英語)も同様の傾向を示した。また、地域との関係性を検討したところ、沖縄(保育)が全ての項目で、東京(保育)は「子どもと上手に関わる自信」で、東京(英語)は「多様な養護対象」で有意差が認められ、地域との関係性が養護性の形成状態に関与することが示された。

(5)「養護性」の形成に子ども時代の経験が与える影響

(4)と同じ大学生調査で、子ども時代の経験と地域社会との関係性に着目した。東京の母親は専業主婦の割合が高く、保育学専攻の母親は医療、福祉など対人援助職の割合が高かった。

東京(保育)の子ども時代のデータからは、地域の人との良好な関係性のなか、自分の暮らす地域への愛着を持ち、積極的に家の手伝いや動物の世話をする子どもの姿が浮かび

上がってきた。東京(英語)の子ども時代に関しては、近代家族型の家庭環境が特徴として挙げられ、東京(保育)と比較して手伝いの経験や地域との関係性の低さが示された。沖縄は、父親の就労が安定しない家庭が多い傾向がみられ、母親が共働きで家計を支える環境のなかで、小さい子どもとの接触経験の豊かさが見出された。また、「子どもと関わる自信」と「子どもに焦点化しない養護対象」において東京より高い結果を示した。子ども時代の経験・地域社会との関係性と「養護性」との関連を検討した結果、いずれの因子においても、保育学専攻が英語学専攻より養護性意識が高かった。また、「年下の子どもとのかかわり」において、沖縄が東京より豊かな経験を有しており、「子どもと関わる自信」を深め、「子どもに焦点化しない養護対象」が有意に高いという結果となった。以上の結果から、「養護性」の形成には、年下の子どもとのかかわりや動物の世話、手伝いの経験に加え、地域社会への愛着があり、良好な関係性を築くことが影響を与える可能性があると考えられる。

(6) 危難に直面した保育士の経験

2011年3月11日に地震と津波に直面した東北地方沿岸部の保育所に勤務する保育士と、その近接地域でボランティアとして働いた保育士の語りをとりあげて、災害時の保育所における保育士の活動と心情、「支援」について考察した。押し寄せるボランティアと大量の支援物資によって「非日常」化する保育所においては、子どもたちの日常生活を取り戻すことがもっとも重要な支援となり得ることや、支援者である保育者を疲弊させない状況を作り出すことの必要性が明らかになった。また、喪失の苦しみに耐えている被災者の「回復」を急かさないことや彼らの尊厳を守ること、支援者もまた「被災者」になり得る可能性についても指摘した。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計8件)

岩崎美智子、施設保育士たちはどのように子どもと関わってきたのか 本土復帰以降の沖縄における養護問題と養護実践、東京家政大学人間文化研究所紀要、査読無、第8号、2014年、pp. 27 - 38

松本なるみ、「養護性」の形成に子ども時代の経験が与える影響 大学生の居住地域と専攻の比較から、保育士養成研究、査読有、第31号、2014年、pp. 67 - 76

星 順子、沖縄県における児童福祉の展開 敗戦後、本土復帰後、現在の社会的養護に焦点をあてて、実践・困難・養護性 保育所・施設保育士の語りと経験、査読無、2014年、pp. 65 - 82

岩崎美智子、支援者であり、被災者でもあった 津波に遭った保育士とボランティア保育士の経験、日本オーラル・ヒストリー研究、査読有、第9号、2013年、pp. 64 - 80

市川 舞、大学生における養護性の形成の検討 地域・専攻の比較から、保育・教育・福祉研究、査読有、第11号、2013年、pp. 45 - 58

岩崎美智子、保育者にとっての困難 他者とのつながり、歴史とジェンダー、日本オーラル・ヒストリー研究、査読有、第8号、2012年、pp. 145 - 161

松本なるみ・岩崎美智子、保育者の「養護性」はどのように形成されたのか - 沖縄県在住の元保育者の語りから -、幼児の教育、査読無、第111巻第1号、2012年、pp. 59 - 63

松本なるみ、沖縄県在住元保育者に見る「養護性」の形成要因 - 子ども時代の生活と他者とのかかわりの考察から -、査

読有、文京学院大学人間学部研究紀要、第13巻第1号、2011年、pp. 33-43

[学会発表](計6件)

IWASAKI Michiko

Two Nursery Teachers Who Experienced the Tsunami: One as a Victim of the Disaster, the Other in a Role Primarily Supporting Victims, 65th OMEP World Congress, Shanghai China, July 11-12 2013

MATSUMOTO Narumi

Nursery Teachers of the Region Hit by the Great East Japan Earthquake Discuss Their Experiences Eighteen Months Later, 65th OMEP World Congress, Shanghai China, July 11-12 2013

松本なるみ・岩崎美智子、沖縄県在住保育者の「養護性」 - 施設保育士の語りをとおして -、日本保育学会第66回大会、2013年5月11日、中村学園大学・中村学園大学短期大学部

市川 舞・松本なるみ・岩崎美智子、沖縄と東京の学生にみる養護性 1 - 他者との関係性の視点から -、日本保育学会第65回大会、2012年5月4日、東京家政大学

松本なるみ・市川 舞・岩崎美智子、沖縄と東京の学生にみる養護性 2 - 子ども時代の経験と意識から -、日本保育学会第65回大会、2012年5月4日、東京家政大学

松本なるみ・岩崎美智子、元保育者たちの生活と意識 - 沖縄県における -、日本保育学会第64回大会、2011年5月22日、玉川大学

[図書](計1件)

岩崎美智子編著、科学研究費補助金による印刷・刊行、実践・困難・養護性 保育所・施設保育士の語りと経験 、2014年、140頁

6. 研究組織

(1) 研究代表者

岩崎美智子 (IWASAKI Michiko)

東京家政大学・家政学部・教授

研究者番号：90335828

(2) 連携研究者

松本なるみ (MATSUMOTO Narumi)

東京家政大学・家政学部・准教授

研究者番号：70442027

(3) 研究協力者

市川 舞 (ICHIKAWA Mai)

宇都宮共和大学・子ども生活学部・専任講師

研究者番号：60412970

星 順子 (HOSHI Junko)

東京家政大学大学院・人間生活学総合研究科

修士課程・院生